

全体会 2「日中韓スウェーデンの環境教育比較研究」

進行：公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF） 国際事業部 加藤超大
：公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF） 理事長 川嶋 直

日本・中国・韓国・スウェーデンから各国の環境教育事情に詳しいゲストを招き、パネルディスカッションを行った。各国で行われている環境教育活動の話聞き、海外の事例を学ぶことで、日本の環境教育の特徴や、日本に応用するとしたらどのようなかたちになるか、日本とどのようなコラボレーションができるかといったことを話し合った。



質問 1. 各国で環境教育が始まったきっかけは？

中 お誕生会

韓 民主化教育（運動）から環境教育（運動）へ

1980年代までは民主化教育（運動）が盛んだった。その後、民主化の運動が「環境」と「地域」を主に柱とするようになり、2000年初期には日本への視察も行った。

ス ゴミ

1962年にスウェーデン自然保護協会が設立。1990年代には学習指導要領に環境教育が取り込まれ、WWFやスウェーデン自然保護協会が良い教材を開発した。

日 民間教育運動として、公害教育や自然保護教育が1960年代にはじまり、1970年代後半から1980年代にかけて環境教育と呼ばれるようになった。

質問 2. 各国でここ最近一番の環境教育の話題は？

中 自然教育・自然欠乏症、LNT、民宿、農場

「あなたの子どもには自然が足りない」（リチャード・ループ）が中国でも翻訳・出版された。

韓 環境教育の領域（野外、森などのフィールド）、対象（子どもとシニア）、方法（自然観察、学習プロジェクト）

ス 参画

多様性教育が盛ん。自分に関わる決定に参加（参画）し、関わるのが大切。

日 ESGDs（郊外教育の再評価含む）

質問 3. 日本の環境教育ここがすごい・ここが不思議

中 匠（自然学校の人たち）

自然学校の人たちは、仕事としてではなく、生き方として環境教育を実践している。

韓 住民も研究者もあきらめない。長い年月の運動が存在している。

ス 地域づくりに環境教育や ESD を活用している。学校制度の外で行われている。

質問 4. これから日本とどのようなコラボレーションができるか？

中 肉まんプロジェクト

韓 人材、つながり。

ス 本とツーリズム

日 情報交流、人材交流（現地に行く）

以下、参加者からの質疑応答。

質問 各国のために「日本が環境教育の未来についてこんな実験をしてくれたら…」という希望があったら教えてください。

中 感性を大切にした環境教育の理論化。

韓 企業の環境教育に関わる活動。

ス コミュニケーション能力の国際版のようなもの。

質問 スウェーデンのサステナブルツーリズムについて、もう少し教えてください。

ス 訪問地のお金が落ちているか、宿泊先の動労条件や水、資源の使い方はどうか。

上記にこたえ、エコツーリズムセンター森 高一氏より、サステナブルツーリズムの国際認証である GSTC（国際サステイナブル観光協議会）の解説があった。

挨拶

清里ミーティング 2016 の参加者に、韓国から団体参加を頂いた。（通訳 1 名含む 22 名）

全体会 2 に先立ち、韓国環境教育ネットワーク（KEEN）代表の金^{キム}テッチョン^{テッチョン}氏より挨拶を頂いた。



環境省環境事務次官の小林正明氏より、全体会 2 の終了後、ご挨拶を頂いた。



3日目 当日募集ワークショップ

2日目の160分&80分ワークショップからの連動企画や、清里ミーティング会期中に出会った参加者同士で「今後」について話し合いをする場、共通テーマについてもっと掘り下げて話をしたいという場、として2日目夜に企画及び参加者を募り、実施した。

◆学校と環境教育をつなぐには！？

実施者：片山 裕美子（酪農学園大学野生動物保護管理学研究室）

学校教育に環境教育を盛り込むためにはどうすればいいか、話し合うワークショップ。議題はなく、各自が現在取り組んでいることやそこで生じる課題を共有し、意見交換を行った。自分ならこうする、実際にどうしているか、といった意見が出され、課題の根幹がどこにあるのか話し合った。最後に、これから自分がどのように活動していくか、ひとりずつ宣言した。



【記録担当者】大河内 友翔

◆あつまれ！自然好き ～いきもの（プレ）サミット（仮）～

実施者：緒方 光明（公益財団法人東京都公園協会）・今井みのり（霧ヶ峰自然保護指導員）、加藤かずみ（京都大学大学院地球環境学舎）・中村 例（特定非営利活動法人キッピーレンズ）

「私はこれが好き！」を持った参加者が集うワークショップ。同じものが好きな人同士はよく話し、関わることは多いが、違う分野はあまり関わることはないのではないか。もし違う分野の人が出会ったら新しい何か生まれるのではないかと。そんな思いから発案されたワークショップ。たとえ「好き」の分野が異なっても、共感できる部分は多く、白熱したトークが各所で繰り広げられた。これだけに終わらず、次につなげたいとの声があがった。



【記録担当者】中西 恵基

◆『里山資源の活用』～ホントに売れる商品づくり&目からウロコな新しい仕組みを考える！

実施者：小原 賢二・佐藤 美保（ホールアース自然学校）

革クラフトの制作を通して、参加者同士で意見交換を行い、里山活用商品と販路の仕組みを考えるワークショップ。まず実施者から材木、猪や鹿など里山の資源の説明がされた後、鹿革を使ったコースターを制作した。専用の道具を使用するのは、ほとんどの参加者にとって初めての体験。ぎこちないながらも、それぞれのオリジナルコースターが完成した。クラフトの後、里山にはどんな問題と資源があるのか、グループに分かれて意見交換を行った。里山の活用を商品に展開し、それをより多くの人に届けるためにはどのような手段が考えられるのか、活発な意見が出された。



【記録担当者】坂田 拓史

◆自然環境教育+α！！アメリカの多様性教育プログラム体験

実施者：栗本 知子（あおぞら財団）・小寺 昭彦（サイエンスカクテル）・
東 麻吏（外あそび tete）

ESD（持続可能な開発のための教育）を進める上で、自然環境教育に求められている+αを考えるワークショップ。まず、3人1組でグループワークを行った。自分のアイデンティティ考え出し、その中から今の自分に影響力のあるものを一つ選び、「誇りに思うこと」「困難だった出来事」を思い出し、傾聴（耳を傾けて、熱心に聞くこと）を意識して、2人1組で話し合った。その後、ESDを進めていくうえで人間社会の多様性・人権について考え、熱い意見交換が行われた。



【記録担当者】山田 真希

◆すこしたちどまって聴き上手

実施者：木邑 恭子・木邑 優子（有限会社グレイスアカデミー）

まずはマナーやコミュニケーションについてのレクチャー。聞き手と話し手に役割を交代して体験し、聞き手は「頷きも相槌もせず無表情で聞く」「笑ったり頷いたり相槌を打って聞く」の2パターンを行い、それによって話し手の話しやすさがかなり変わることを体感した。また、聞き手は聞いた話を最後に要約することで、話をしっかり聞いていたことが伝わり、「より良い聴き上手」になるコツについて意見交換を行った。



【記録担当者】関野 真子

◆プチトレッキング@清里 溪谷とサワグルミの小径

実施者：芦川 奈穂子・米山 裕美子（認定特定非営利活動法人富士山クラブ）

清泉寮の周りの自然歩道のひとつ、サワグルミの小径のコースを2時間半かけてトレッキング。コース周辺でみられる動植物の説明を受けながら、紅葉の美しいコースをめぐる。川のそばまで下りて天狗岩を探し、またサワグルミの木の下まで行って観察した。途中、実施者からの問題提起に対して、参加者が自らの持つ知識などを他の参加者に紹介する機会も設け、トレッキングを通して参加者同士の情報交換の場としても活用された。



【記録担当者】中澤 杏樹

◆環境教育プログラム Project WILD を体験！！

実施者：柳井 麻貴（一般財団法人公園財団）・後藤 清史（野たまご環境教育研究所）・
藤村 哲（体験創庫かけはし）

アメリカ発祥の Project WILD を体験するワークショップ。まず、実施者から Project WILD の内容や特徴、資格などについて説明があった。その後参加者の自己紹介をし、お互いのことを知ったうえで「OH！ DEAR！」や「人間イス」、「身近なものから水辺の役割を考える」、「瞬間冷凍動物」といった Project WILD や Project WET のプログラムを体験した。体と頭を使ったプログラムに参加者は終始楽しんでいる様子だった。



【記録担当者】大垣 柚月

◆新しい森づくりを考えたい／（在来）馬を活用した環境教育の可能性

実施者：高木 幹夫（日能研）・渋谷 晃太郎（岩手県立大学総合政策学部）

森林の歴史についてのレクチャー後、参加者が現在行っている取り組みについての情報交換や今後の森づくりに対しての意見交換を行った。その中で林業を行うにあたっての経費問題や広葉樹を林業に導入する事の利点や課題などが話題に挙がった。

また、現在取り込まれている活動の中で参加者の関心を集めたのが、働く馬についてであった。働く馬の多くの魅力を発見すると同時に、これからの可能性や課題を共有することもできた。



【記録担当者】西尾 有香音

◆環境教育を「とことん」かんたんにするワークショップ

実施者：芦田 梢（相模原市立環境情報センター）・中谷 翔（南越前町地域おこし協力隊）・
多田 正和（岡山理科大学自然を学ぶ会 NSS）

環境教育という難しい問題を様々な方面から向き合い、「かんたんに」をテーマに2つのグループに分かれ、ディスカッションした。

まずは2人1組になり、「環境教育について説明する」人と、「環境教育について何も知らないつもりで聞く」人に役割を分け、途中で役割を交代しながら約3分間、お互いに説明し合った。視点を変えて話し合いをしながら、環境教育という言葉をわかりやすく伝えるためのポスターをグループで作成し、全体に共有し合った。



【記録担当者】浜崎 竜斗

◆森を歩いて「病気になりにくい身体」をつくる『森林セラピー』ワークショップ

実施者：松村 正道（M&I 研究所）

森林セラピーが最近なぜ注目されるようになったのか、解説から始まり、医学的なデータで森林セラピーの効果を示すと同時に、実際に今の健康状態の測定をしてから森を歩いた。きれいな景色を見たり、川の流れる音を聞いたり、草の上に寝転がったりして森林セラピーのプログラムを体験。その後、歩いた結果と身体に変化があったか測定を再度行った。最後にはリラックスできた、足が軽くなった、といった感想が出された。



【記録担当者】吉田 直哉

◆森カフェたき火でリンゴジャム作り+α

実施者：谷口 哲郎・小暮 香織（特定非営利活動法人つがる野自然学校）

柴原みどりマリアンヌ（公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF））

火おこしから始まり、その炎を用いてリンゴジャムや焼き芋、焼きマシュマロを作った。たき火は昔から生活に欠かせないものでもあり、また全員で同じ料理を食べ、同じ時間を過ごし、同じ活動をする事で、感覚を共有することができ、初めて会う人でも仲良くなれる空間をつくれるものである。今回の森カフェも、たき火を起すのに必要な枝葉を集めたり、食べるものをみんなで共有したりと、温かい雰囲気自然と作られた。



【記録担当者】釜谷 優太

3日目 全体会 3「環境教育の未来を考える！あなたの次の一步は？」

進行：公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF） 企画部 嶋川 光
公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF） 理事長 川嶋 直

挨拶：環境省環境教育推進室 室長 永見 靖氏

6～7名のグループに分かれて円座を作り、この3日間の感想や学んだこと、感じたことをひとりずつ話し合い、共有する時間。出された話題、キーワードなどは各グループに配られた「えんたくん」へ自由に書き込まれていった。

えんたくんミーティングは、1名を残して他のグループへ席替えするワールドカフェ方式で進行。最後ははじめのグループへ戻って各グループで出された話題を報告し合い、配られたA4用紙に自分の『次の一步』を書き、グループ内で共有した。



ベテランからは人材育成に関すること、若手からは「自立する」「アクティブに動く」など自分の決意表明や、環境教育の業界革新などの姿勢が多く出された。

清里ミーティングが始まった30年の間、ひとりひとりが行ってきた小さな動きがつながり合うことで、大きな流れを生んだ事例をいくつも見てきた。ひとりにとってはたった一歩でも、この場にいる200人がそれぞれ一歩を踏み出せば200歩になる。



最後に、環境省環境教育推進室室長の永見靖氏から自身の「次の一步」の表明と3日間の感想を交えて挨拶を頂き、全体会3は終了した。

閉会式

最後に、(公社)日本環境教育フォーラム理事長・川嶋直より閉会の挨拶と来年度の開催日程の発表があった後、外に出て会場である清泉寮を背景に記念写真を取り、清里ミーティング 2016 は終了した。

来年度は 2017 年 11 月 18 日 (土) ~ 20 日 (月)、会場は山梨県北杜市の清泉寮 / 八ヶ岳自然ふれあいセンターで開催する。(通算 31 回目)

